

研究課題	マーガレット・フラーからゾラ・ニール・ハーストン、スーザン・ソントグにいたるソーシャル・リフォームと理想構築の言説に関する研究
研究代表者	伊藤 淑子 (文学部 人文学科 教授)

## 1. 研究目的

本研究の目的は、『19 世紀の女性』を主著とするマーガレット・フラーの社会改革の言説の系譜を、20 世紀はじめのゾラ・ニール・ハーストン、そして 20 世紀後半から 21 世紀のスーザン・ソントグへと結ぶことである。時代に固有の困難があることはたしかであるが、それを越えて、3 人の女性の社会に対する異議申し立てとソーシャル・リフォームの提言には、社会の矛盾に対する強い批判精神と妥協を許さない理想の追求という点で共通するものがあると考えからである。3 人の著作や発言を丁寧に比較分析することによって、アメリカにおいて女性の視点から、どのような理想的な社会が描かれてきたのかということを探り、言説の伝統の形成を考える。

フラーはわかりにくい、というのが定説となっている。たしかにフラーの論理性は直線的ではない。神話から同時代の小説にいたるまで、多様な物語の引用は論理的な文脈を混乱させる。しかし、それを私はフラーのレトリック的な戦略であると考え。女性の論理性が否定される状況にあって、「ない」とされているものを用いて「ない」ものが「ある」と証明することを放棄したときに、一見錯綜する論理性は、フラーがとった戦略的な手法であったのではないだろうか。

フィクションと社会的な発言を重ね合わせるという点で、ハーストンとソントグにも類似の手法を見出すことができると私は考える。ハーストンは黒人解放、ソントグは文化批評からの評価が高いが、女性の戦略的言説の構築という視点から、新たな系譜を見出すことが本研究の目的である。

フラー、ハーストン、ソントグは、19 世紀から 20 世紀、21 世紀へと、それぞれの時代のアメリカの言論界に影響を持った 3 人であり、ともに小説から社会批評まで活動の領域は広がる。急進性と強い批判精神という点でも共通する 3 人であるが、それぞれ異なる文脈で読解され、評価を受けていった。それぞれの社会に対する異議申し立てとソーシャル・リフォームの提言を読み直すとともに、時代の差異を超えて共有される理想の言説とフェミニズムの系譜を立証していく。

フラー、ハーストン、ソントグそれぞれの単独の研究は比較的たくさん見られるが、その著作や発言の比較研究はまだ欧米も含め、見られない。フラーの著作の動機が黒人やネイティブ・アメリカンなどのマイノリティの存在によって喚起されていることを拠点として、フラーとハーストンを結び、ソントグの戯曲にフラーが登場することを根拠に、フラーとソントグの影響関係を読み取ろうとする本研究は、これまでのアメリカン・スタディーズやジェンダー・スタディーズが深く検証することのなかった領域を考察することになる。

## 2. 研究方法

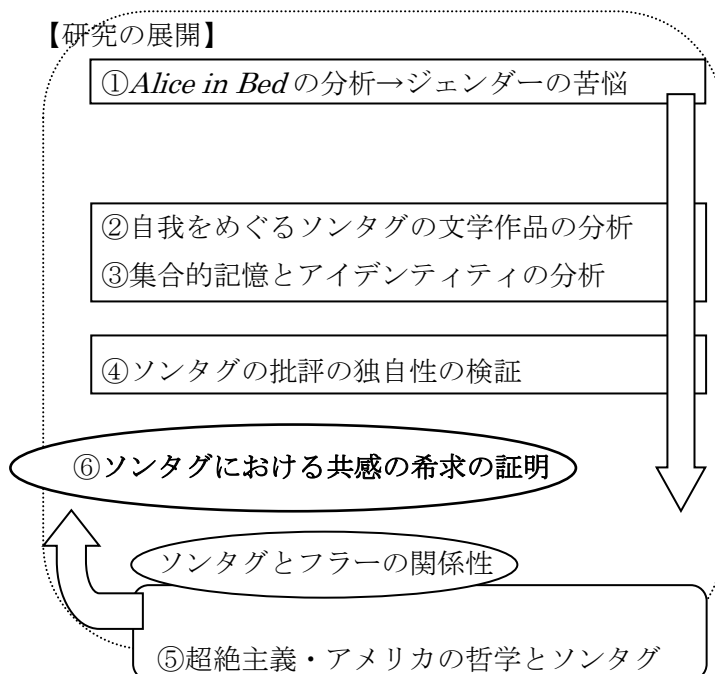
本研究の取り組みとして、次のように段階を想定した。

- (1) 第一段階として、フラーの著作から、人種に関する記述を抜き出し、人種がどのように自由の実現を阻んでいるとフラーが考えていたのかを明らかにする。
- (2) 第二段階として、ハーストンの著作と発言から、アメリカ社会の現状批判を読み解くと同時に、どのような社会を理想としていたのか、ということをあきらかにする。
- (3) 第三段階として、ソントグの著作、発言から、とくにジェンダーと人種に関係の深いものを選び、それを分析することによって、ソントグの批判の所在と理想的な社会像をあきらかにする。
- (4) 研究の最終段階として、フラーからハーストン、ソントグへと、どのような異議申し立てと理想の希求の継承および変遷があったのか、ということを明らかにする。

平成 26 年度に第一段階と第二段階に取り組み、平成 27 年度は第三段階に着手した。本研究を完成するために、平成 28 年度も引き続き研究を進め、図のようなテーマの展開を追いたいと考えている。

### 平成 28 年度の取り組み

ソントグの著作を一次資料とし、脱構築的にテキスト分析を行う。雑誌や新聞に掲載された記事、インタビュー録画なども一次資料として資料収集する。二次資料としてアメリカ文学に関する文献の他に、哲学、批評理論の文献を活用し、ソントグへの影響を比較分析し、ソントグの独自性を検証する。



### 3. 研究成果と公表

#### (1) 今後の展望とこれまでの研究成果

最終的な研究成果の公表は、平成 28 年度の取り組みも含め、本年度中に原稿を執筆し、来年度には本として出版したいと考えている。*Alice in Bed*を基軸とする比較文学の手法で、ソントグが複数のペルソナを登場させることによって、ジェンダー法学のドルシラ・コーネルの説く「イマジナリーな領域」を文学的に実現しようとしていることを、多角的に論じたい。沈黙を強いられてきた女性の声を歴史の襞のなかから探し出し、社会の歪みを顕在化させる点において、フラーからハーストン、そしてソントグへとつながる新しい系譜を読み解きたい。

フラーとソントグが描く理想的社会の交差は、「響きあうペルソナ:『アリス・イン・ベッド』におけるマーガレット・フラー」と題して学会で発表している(ジェンダー史学会第 11 回年次大会)。また、フラーとハーストンの本研究における関連性については、すでに「結婚という装置:フラーからハーストンへ」と題して論じた(『大正大学研究紀要』平成 27 年 3 月)。これらの成果の上に、最終年度である平成 28 年度中に研究成果をまとめていく予定である。

#### (2) 平成 27 年度の研究結果の公表

研究の途中経過の発表として、英米文化学会 11 月例会で、「伝記にみるマーガレット・フラーのイメージ (A Comparative Study of the Images of Margaret Fuller in her Biographies)」と題して研究発表を行った。ソントグがどのようなペルソナをフラーに担わせたか、それが従来のフラーのイメージとどのように異なるのかを検証した。

フラーには複数の伝記があるが、そのなかから主だったものを比較し、それぞれの伝記における語りにおいて、フラーがどのように表象されてきたかを考察した。2010 年に生誕 200 年を迎え、2012 年、2013 年に立て続けに詳細な伝記が 2 つ出版されたことは、アメリカ文学における女性作家の再評価の動きのなかでも特異なことである。フラーは同時代の批評家たちによって「慎みに欠ける頭でっかち」といった歪曲したイメージを張り付けられ、海難事故で没したあとも引き継がれた(Myerson)。女性の知的な卓越が歓迎されない社会的な環境のなかで、アメリカン・ルネサンスの中心で創作活動のスタートを切りながら、やがてジャーナリストとしてニュー・ヨークへ、そしてヨーロッパへと活躍の舞台を国際的に広げていくが、ボストン一帯を中心とみるならば、フラーはむしろ周辺化されていったともいえる。フラーの 40 年の生涯を描く伝記に映し出される。

それは規範を逸脱する者を、それぞれの時代においてどのように受容してきたかということの検証でもある。「女らしさ (the Cult of True Womanhood)」の規準として、「敬虔、純潔、従順、家事」が筆頭に挙げられる時代に(Welter)、類まれな知性をもつフラーは酷評を受ける。ブラウンソンは「She is a heartless priestess, though of what god or goddess we will not pretend to say.」(230-31)と評しているが、だからこそ、フラーが海難事故で没したあと、追悼記を出版したエマーソンたちは、必要以上にフラーの清廉潔白なイメージを生成しなければならなかった。

その後もフラーへの嘲りを含んだ批評が続き、女性としての嗜みを代償に。「She wrote too much, with necessity driving her pen: she wrote too hastily, with a constitutional impatience of organizing and detail; she wrote awkwardly, for conversation and not the written word was her natural medium.」(Wade, v)や、「...cannot be dismissed from the hyperbolically female intellectualism of the period, the slightest invocation of which invites our laughter.」(Miller, xvii)といったように、フラーの知性を揶揄する記述は、多数見られる。

生誕 200 年を迎えて出版されたマーシャルとマターソンの伝記もまた、それぞれ異なるフラーのイメージを伝える。「Margaret had believed that she and Giovanni “could have a good deal of happiness together in what remains of life,” once they reached America.」(Marshall, 377)と、マーシャルは家庭的な幸福への希求を強調する。一方で、マターソンは「The logic of her life was supplied by her insatiable desire to change, to progress, to keep moving.... If any idea would have been intolerable to Fuller, it was the absence of the future, for without a future, nothing about her made a particle of sense. Her lifelong belief that, through adversity, she would always grow, progress, and prevail died moments before she did.」(Matteson, 422)と、未来志向で改革的精神に富み、個人主義的で挑戦的なフラーを描く。

このようにさまざまなイメージを着せられてきたフラーであるからこそ、ソントグはフラーを女性の状況を多角的に映し出すペルソナとして採用したのだといえる。そしてソントグが *Alice in Bed* でフラーに語らせた女性であることの嘆きは、ソントグの他の小説に登場する女性の声と響き合い、やがて唱和する。しかしその過程が容易ではないことを、作品に仕掛けた多様な手法によって、ソントグは示している。

### (3) 平成 28 年度の研究発表の予定

また平成 27 年度の成果として、平成 28 年 7 月にウィーンで開催される国際比較文学会で、本研究に関連する研究発表をすることが平成 27 年 11 月に決まっている。日本における女性の権利意識の出現とその歴史も視野に加え、本研究で得たことをもとに発表を行いたいと考えている。

### 引用文献

- Brownson, Orestes A. “Review of *Sumer on the Lakes*, in 1843.” Brownson’s Quarterly Review 6. Oct. 1844. 546-47 in Eve Kornfeld. *Margaret Fuller, A Brief Biography with Documents*. Boston: Bedford St. Martin’s, 1997. 230-31. Print.
- Cornell, Drucilla. *The Imaginary Domain*. New York: Routledge, 1995. Print.
- Marshall, Megan. *Margaret Fuller: A New American Life*. New York: Houghton Mifflin Harcourt. Print.
- Matteson, John. *The Lives of Margaret Fuller*. New York: Norton, 2012. Print.
- Miller, Perry. “Introduction.” *Margaret Fuller: American Romantic*. Ed. Perry Miller. New York: Doubleday, 1963. Print.

- Wade, Mason. "Introduction." *The Writing of Margaret Fuller*. Ed. Mason Wade. New York: Viking, 1944. Print.
- Welter, Barbara. *Dimity Convictions: The American Woman in the Nineteenth Century*. Athens, OH: Ohio UP., 1977. Print.